

題 目 なぜ日本人は「匿名好き」なのか—SNS プロフィール秘匿行動における社会生態学的原因に関する日米比較研究—

氏 名 中村圭汰

指導教官 結城雅樹

本研究では、SNS 上における匿名性選択の日米比較を行った。また、SNS の構造による影響を検討し、さらに選択の要因を関係流動性(Yuki et al., 2007)等の概念を用いて探った。

Morio and Buchholz(2009)や Bovee and Cvitkovic(2010)によると、日本人はアメリカ人よりも SNS 上で匿名性を高める傾向にあるとしている。しかしどちらの研究も既存の SNS を調査対象としているため SNS の構造によって利用傾向に差が生じる可能性が考えられ、後者は原因の特定がなされていない点で問題がある。

SNS を利用するメリットの一つとして新規の対人関係形成の機会の獲得があるが、デメリットの一つには Vitak(2012)の、異なる社会的カテゴリーに属する他者が単一の集団に集約され緊張が高まり自己呈示が減少することを指す context collapse が挙げられる。本研究ではメリットとデメリットが一定ではなく関係流動性の高低によって増減すると考える。利用する SNS が第三者からの閲覧・検索が可能なものである場合、低関係流動性社会では身の回りの社会的カテゴリーが異なる価値観を持ちやすく、context collapse によるリスクが大きく、この社会に住む人々はリスク軽減のために情報を秘匿し匿名性の度を上げる。対して高関係流動性社会では身の回りの社会的カテゴリーが類似した価値観を持ちやすいため context collapse のリスクが小さく、SNS を利用した対人関係形成のため情報を公開し匿名性の度を下げる。しかし SNS が第三者からの閲覧・検索が不可能な構造を持つ場合、匿名性の度は SNS が規定するデフォルト状態から変更されないと考えられる。

調査は web 上で行った。質問紙の前半には架空の SNS を利用する際にどのプロフィールを非公開にするかを尋ねるシナリオ質問紙、後半には事後質問紙を設けた。シナリオは SNS が第三者からの閲覧・検索が可能なものと不可能なものの2条件を設けた。

結果として、どちらの条件でも日本人はアメリカ人よりも多くのプロフィールを非公開にした。更に、国を独立変数、非公開項目数を従属変数、関係流動性と、一般的信頼・関係拡張動機・関係維持動機・プライバシーに対する懸念の4つの要因を一つずつ関係流動性と直列に繋ぎ媒介変数とした媒介分析を行ったところ、有意もしくは有意傾向の媒介効果が見られた。

以上のことから、関係流動性に起因する他者一般に対する信頼、関係を拡張もしくは維持しようとする動機、そして SNS 上のプライバシーに対する懸念によって、日本人はアメリカ人よりも SNS の構造を問わず匿名性の度を上げると考えられる。